カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センターたより

春号
24 年5月
No.68

カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター事務局
〒604-8006 京都市中京区河原町三条上ル
発行人／奥村　豊
TEL 075-366-6609　FAX 075-366-6679
E-mail: bukatu@kyoto.catholic.jp
Home Page http://www.kyoto.catholic.jp/bukatu/

寝た子を起こす

酒井　俊弘
（カトリック大阪高松大司教区補佐司教）

振り返って

私が差別と意識して向き合ったのは、大学に入ってからのことです。後から考えればそれまでも気づくことができる機会はあったのですが、その時は分かりませんでした。大学の 1 年生のときに「部落問題概論」という授業が通年であり、歴史的経緯や大阪の実情など多岐にわたって学ぶことができ、まさに目からうろこでした。私は尼崎市の公立小学校で学びましたが、大学の授業を受けながら、「そう言えば、小学校の頃のあの友だちが住んでいたのは同和地区と呼ばれていたな」と思い出すことがあり、知らないというのは恐ろしいことだなと感じました。また、大学には、同好会のような形でセツルメント（隣保館）での活動に積極的に関わっている学生たちがいて、私の同級生も何人かが参加していました。私自身が直接参加することはなかったのですが、活動の様子や意義などについて友人たちが熱く語ってくれたのを懐かしく思い出します。

その後、関西を離れて過ごす時間が長く、人権に関して学ぶ機会を逸していましたが、2004 年に旧大阪教区内で司祭として働き始めてからは、年に一度、太田勝神父様が担当されていた教区月修の際に学ぶことができました。様々な立場の当事者や支持者の方々から直接お話を聞けたことは、貴重な体験でした。

このような私自身の体験を振り返って思うのは、「寝た子を起こす」ことの大切さです。差別がどのように実際に行われてきたのか、そして今も行われているのかは、教えてもらわないと気づかないことが多く、教えてもらって初めて「見る目」を与えてもらえるからです。

最近気づかされたこと

最近、差別について気づかされた機会を挙げると、二つのことがあります。

一つは、社会司教委員会が現在発行準備中の冊子『すべてのいのちを守る教会をめざして―ハンセン病問題　過ちを繰り返さないために』です。司教総会で議題に挙がった時だけでなく、広報担当司教として社会司教委員会にも陪席していますので、編集の過程をずっと拝見してきました。ハンセン病者への人権侵害の歴史を詳しく知り、さらにはカトリック教会の関わり方の問題点に気づかされました。人生のすべてを捧げてハンセン病者のために尽くした司祭や修道者の真摯な信仰と愛に深い敬意を持つべきなのは言うまでもありませんが、当時は一人ひとりを救済の客体ではなく解放の主体として見ることができていなかったのも確かでしょう。今を生きる私たちが、そのような教会の経験を生かして、一人ひとりの尊厳を守るために働くことが求められていると改めて思いました。

もう一つの機会は、聖書に描かれる障がいをメタファーとして使うことの問題です。聖書以外でも、病気や障がいを比喩として用いることの不適切さが昨今指摘されるようになってきましたが、聖職者としてこれまで聖書の中の出来事やたとえ話を解説する際に、問題となるような使い方をしてきたのではないかと気づかされました。これからは留意していかなければならないことだと、反省しています。

寝た子を起こすことは大切

このように振り返ってくると、「寝た子を起こす」ことがとても大切なのだと、よく分かります。私たちの心の中には、ぬぐいがたい差別意識があります。昨年、東京カトリック神学院通信に寄稿した一文の冒頭は、次のようなものでした。

亡くなった父は大阪の天満橋あたりの生まれだったせいか、都都逸のような言い回しを口ずさむことがありました。京都生まれの母はそれをあまり好まなかったのですが、家族の中で面白おかしく使うことはよくありました。私は三人兄弟の末っ子でしたが、高校生の頃には家族で一番背が高く、靴のサイズも一番大きくなりました。その私の靴を見るたびに母は「バカの大足…」と言い、それを受けて私が「…マヌケの小足、ちょうどいいのはオレの足」と言い返すのが常でした。

自分が一番よい…という意識から差別意識が生まれ、それをそのまま言動に移してしまうことが私たちにはあります。自分を振り返ることで気づくこともありますが、何より周囲から気づかせてもらう、つまり「起こしてもらう」必要があるのです。

気持ちよく起きてもらうために

ところで、寝た子を起こすと、せっかく寝ていたところを起こされた子どもは機嫌

が悪いのが普通です。人権について取り組むことによって、私たちは寝た子を起こす側に立つことになります。ここまで書いてきた通り、そうすることはとても大切で正しいことなのですが、だからこそ気を付けるべき点があります。それは、正義を振りかざし過ぎないことです。最初に述べた大学時代の経験の中で、いやな思いをしたこともありました。それは、在学中に大学構内で差別的な事象が起こったことへの抗議活動の一環として、学生会の役員さんたちが授業中に押しかけ、教えている教師たちを無視し、アジテーション的な話を一方的にしたことです。言っていることは正しいし、呼びかけることの重要性も理解できるけれども、やり方は間違っているだろう…と感じたのを覚えています。正義はそれだけで切れ味が鋭いものです。だからこそ、丁寧に主張するのが一番効果的です。誰かに向かって人権に関する問題点を指摘するときこそ、その相手の人権を尊重しなくてはなりません。無知を声高に咎めるのではなく、相手に寄り添って新たな景色を見ていくことで、「寝起きの機嫌悪さ」を感じさせずに起こすことができるでしょう。

最近、1987 年に帰天したカトリック信者の飯島幡司（いいじま・まんじ）の名著『キリスト教の社会理念』を読み返しています。その中の一文をもって拙稿を閉じることにいたします。

> ライオンが人間よりも立派な顔をしているのに、虎が人間よりもはるかに強いのに、人間だけが尊重されねばならないのは、天が下に生きとし生けるもののうちで、人間だけがペルソナというものに当るからである。この意味において、人間は神とおなじ世界に属する。人間が神の似すがたといわれる理由がここにある。（送り仮名等原文ママ）

「あなたは、神の国から遠くない」

奥村　豊（京都教区司祭）

誰しも本分を見失ったらいけない。洗礼を受けて預言職、祭司職、王職を賜ったのだから、み言葉を宣べ伝え、聖なる祭儀に参加しつつ生活においては自らを供え物とし、それぞれの賜物に応じて具体的に奉仕の務めを果たさなくてはならない。社会的身分や職業からくる役割において、それらを誠実に果たしていくことはキリスト者の本分であろう。教会の役務者としての司祭が秘跡の執行や祈りを怠り福音を宣べ伝えないならば、本分を果たしているとは言えない。虐待やその隠蔽に関わることは論外であり、大きな罪である。

教師が学問の追究を怠り子どもの成長に無頓着で権威を振りかざしているなら、本分を果たしているとは言えない。医者が国民の健康な生活に寄与することを放棄し、かえって健康を損なう治療を施すなら、本分を果たしているとは言えない。政治家が国民の生活を省(うち)みず、ひたすら私利私欲に走っていては、本分を果たしているとは言えない。

福音書に登場する長老、祭司長、律法学者には各々本分があったはずだ。表向きはその本分を装っていたものの、裏では今でいう利権を有していた。イエスが神殿で大暴れしたのはこの利権に対する反応と見ていいだろう。ファリサイ派、ヘロデ派、サドカイ派と呼ばれる人々はそれぞれに異なる思想を有していたが、その本分そっちのけでイエス排斥に動く。ファリサイ派とヘロデ派の人々についてマルコ福音書を見てみたい。

「**人々は**、イエスの言葉じりをとらえて陥れようとして、ファリサイ派やヘロデ派人々を数人イエスのところに遣わした。」（マルコ１２：１３）

この後、皇帝への税金を巡っての問答が続く。どう答えても、律法違反か皇帝への反逆ととられるところ、イエスは巧みにそれをかわすというあのエピソードである。出だしの「人々は」の人々とは誰のことだろうか。一般的な庶民とは考えにくい。ファリサイ派やヘロデ派をそそのかしイエスを陥れようと企んでいた人々がいたことがうかがえないだろうか。２つの派は遣わされたのだから、具体的に遣わした何らかの集団あったはずだろう。それが今でいう利権を握った人々であったというのが自然だと思う。そして、思想を異にする者たちがその本分を度外視してイエス排斥に加担するために、無料奉仕でけんかを売りに行くとは考えにくい。

出血症の女性のエピソードも見ておこう。
「１２年間出血の止まらない女がいた。多くの医者にかかって、ひどく苦しめられ、全財産を使い果たしても何の役にも立たず、**ますます悪くなるだけ**であった。」（マルコ５：２５）

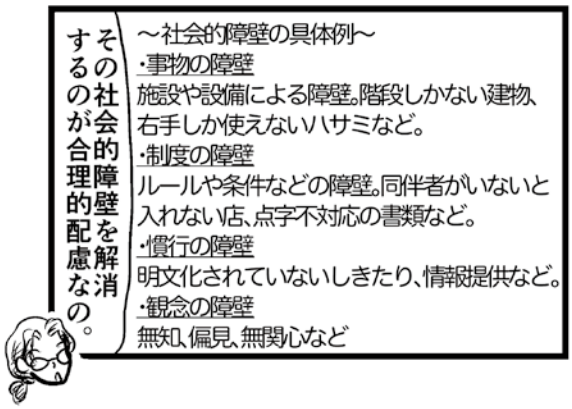
医者は病の治癒に携わるはずが、多くの医者は金をとるだけで病を癒すことができなかった。そればかりかますます悪くなるとしたら、それは医療に問題があると言わざるを得ない。金を返せーーと叫びたくならないだろうか。現代では医源病という言葉があるくらいで、投薬や誤った治療によってますます病が悪化するような現実がある。複数の病気を抱え大量の薬を毎日、一生飲み続ける生活を結構多くの人が強いられてはいまいか。精神薬への依存も深刻だ。少しやんちゃな子どもを心配して、親が精神科を受診させる。病名がつけられて投薬が行われ、下手をすると一生病院通いをし薬を飲み続けることになる。おとなしく手のかからない人間をつくりあげ、病院の収入を安定させることができる。そこにやはり利権の存在が見えてくる。医療の本分は本来健康に導くことであって、病人をつくって囲い込むことではないはずだ。これは、宗教団体にもあてはまることだ。その本分は人間の解放を目指すのであって、囲い込みではない。
政治家については自分で考えてみてください。

福音を宣べ伝えると言いながら、本分から外れてずいぶんと凹むことばかり書いてしまった。しかし、見せかけの安心・安全、見せかけの美しさ、見せかけの健康を求める人間の弱さに付け込んで金儲けに奔走する輩が世界に確かに存在していて、一見正義を装っているのである。また、社会生活をしている限り自分が利権集団の一部であることも大いにありうるのだ。それでも主イエスからの言葉を心からいただきたいと思う。

「イエスは律法学者が適切な答えをしたのを見て、『あなたは、神の国から遠くない』と言われた。」（マルコ１２：３４）

#97 施行から8年!「障害者差別解消法」!

#98 合理的配慮！



#99 心にゆとりを!?

2024. April

第 15 回対話集会

日時：2024 年 2 月 12 日
場所：サクラファミリア
講師：森　達也さん

森達也さん　『千代田区一番一号のラビリンス』

長崎　壮（クラレチアン宣教会司祭）

2 月 12 日月曜日午後 2 時からサクラファミリアにおいてカトリック大阪管区部落差別人権活動センター主催による対話集会が開かれた。

今回は講演者として、ドキュメンタリーディレクターであり、ノンフィクション作家でもある森達也さんを招き、森さんの著書『千代田区一番一号のラビリンス』とのタイトルで行われた。

集会のはじめに大塚喜直司教が挨拶に立ち、世界情勢や元旦の能登半島地震にも触れつつ、「戦争・災害あるいは貧困がきっかけとなり、差別が助長されることがある。カトリック教会としても人間を尊重していくために、歴史を振り返りしっかりと社会をとらえていきたい」と大要を述べられた。

一国のメディアと社会と政治は同じ水準

大塚司教の挨拶に続き森達也さんとの対話集会の本題に入っていったが、森さんは自身がどのような経緯でドキュメンタリー制作や報道の世界に本格的に携わることになったか、その背景から話し始められた。

森さんにとってひとつの大きなきっかけとなったことは、1995 年 3 月に起こったオウム真理教による地下鉄サリン事件であった。

森さんはオウム信者のドキュメンタリーを制作したが、その取材過程で気づいたことは多くのオウム信者がどこにでもいるごく普通の人間であり、むしろ純真な人間であったということである。

しかしそのようなオウム信者へのインタビューや日常を収めたドキュメンタリー作品を制作後にテレビ局に放映の話を持ちかけたところ、ほとんどのテレビ局にその放映を断られたという。

その理由は、テロリストは狂暴・凶悪な人間、教祖麻原彰晃に洗脳された殺人鬼であることがはっきり伝わらないと反響が期待できないという日本のメディアの報道体質にあると森さんは見る。

このたびの対話集会のタイトルともなった森さんの小説『千代田区一番一号のラビリンス』も場所の設定が皇居であり、皇族の名前が敬称抜きで書かれていることや皇族同士の関りの描写が世俗的であったためであろうか、掲載・出版に当たっては大手の出版社からは軒並み出版を断られ、書評さえも書かれない作品となった。出版社が出版に消極的になった理由は言うまでもなく右翼団体等からの圧力を恐れてのことである。

このような体験を通じて森さんは「一国のメディアと社会と政治は同じ水準」であり、“メディアは社会の合わせ鏡”だという理解に至ったという。

そういえば確かに昨今テレビ番組が本当に陳腐な内容になっていることに気づかされるし、テレビ以外のメディアでも軽薄な内容、ことばが目立つようになっている。筆者は前回の対話集会で川口泰司さんの話で川口さんの語られた、人の心理には「見たい情報に囲まれる」（フィルターバブル）と「信じたい情報を信じる」（認知・確証バイアス）ということばを思い出したが、私たちは今の情報社会においてどのように情報を選び取っているのであろうかと考えさせられる。ほんものの情報を選び取るためには、謙虚さと勇気が必要であり、それが大塚司教の挨拶の中の「しっかりと社会を捉えていく」ということにつながるのだろう。

危機扇動と集団化

二つ目の問題提起は地下鉄サリン事件によって社会にどのような変化がもたらされたか、またその変化の中で見られた日本社会の特徴についてであった。森さんは社会の変化という面では、国家のセキュリティ意識は増し、監視カメラがあちらこちらに置かれるようになったことを挙げ、地下鉄サリン事件以降の社会の流れから日本社会の特徴を「不安と恐怖を燃料に集団化する社会」とした。

人間は不安と恐怖があると異物を探しそれを排除しようとする。人間は弱いから孤立を恐れ、多数派につこうとして集団化するのであるが、不安と恐怖を燃料に集団化する社会構造は日本社会の負の文化ともいえる学校のいじめ問題にも影響している。

森さんは多数派に入ろうとするのは人間の根本的心理であり、集団化は日本に限ったことではないこととして、ここ 20 年、世界では独裁政治家が増え、そういった政治家が体制側にいる国では総じて移民の受け入れに消極的であるということも指摘している。

この根底にあるのは、「自分の国に異物を入れたくはない、同質で固まりたい」という発想であり、それにより国家は国民を異物排除へと扇動していくことになる。

人を信頼する心

森さんの三つ目の問題提起は厳罰化の社会構造に及んだ。

森さんの主張は「黒か白か　敵か味方かとい二元論的なものの考え方が異物排除の思想につながり、それが集団化することで厳罰化の社会構造を生む」というもの。

森さんはまずノルウェーのオスロにある刑務所を訪問した時のドキュメンタリーを見せてくれた。

その映像を見て私たち対話集会の参加者が驚いたことは受刑者たちが刑務官と会話を楽しみながら食事をし、設備の整った個室で自由に生活していることだ。メディアを通じて見聞きしている日本の刑務所の厳罰主義とは大きな違いである。現在ノルウェーでは死刑・終身刑がないが 1970 年代は刑法は厳罰志向であったそうである。ただそれを寛容化したら逆に治安はよくなったらしい。このような刑罰の寛容化をしているのは北欧 4 か国であり、その背景にあるのは、これらの国の社会学・心理学などの学識経験者の「酷い扱いを受けた人は酷いことをするようになる」ということ。さらに犯罪の背景には三つの不足があり、それらは１．幼少期の愛情不足　２．発育期における教育の不足、３．現在の貧困であるという共通理解が下地になっているという。

北欧 4 国も長いキリスト教文化を持つ国である。人間は本来誰もが神の似姿性を持っており、環境や教育によって人間は変わるのだという現代キリスト教的な人間性善説の思想が社会に深く浸透しているような印象を受けた。

さて、ノルウェーでの犯罪者の社会復帰と社会の受け入れの実例をいくつか挙げた後、森さんは日本での殺人などの重犯罪件数が戦後どのように推移してきているかとの質問を参加者に投げかけた。

彼が提示したデータによると、実は日本では殺人事件の件数は毎年下がっている。殺人事件の割合を日本と人口比で比較したデータによると、EU では日本の 3.5 倍、アメリカでは日本の 10 倍である。それにもかかわらず日本人が他の先進国と比較して体感としての治安の良さをあまり感じることがないのは、マスメディアが不安と恐怖を煽り立てるためにこういった事実を報道しないためである。

過ちを受け入れたとき、社会を変える力は出る

「日本人は個性が薄く、あまり自己主張しないが、集団となったときに急に怖い存在となる」というのは外国人から見た時の日本人の印象のステレオタイプであるが、森さんはこういった集団化を防ぐためには、「一人ひとりの人間が批判を恐れることなく主体的になること」と提言した。

集団化・異物排除の国民性や社会構造があるからこそ、ハンセン病患者の隔離を解除することは欧米に遅れ、そして部落差別などがいまだ解消されない要因であると森さんは言う。

こういったことを防ぐには、先ず歴史を知ることという。

個人も失敗を受け入れそれを乗り越えることによって成長するが、国家や社会も成長・成熟していくためには、歴史を検証し過ちがあればそれを受け入れ、主体的に考え

主張できる人が多くなっていくこと。そこから社会を変える力は出てくると森さんは締めくくった。

森達也さんを迎えて

大藪　岳史（河原町教会）

わたしは、現在 40 名ほどの高齢者のケアマネージャーを務めている。介護サービスを必要とする方々や事業者さんと連絡し、介護保険を利用する手続きに携わる。わたし自身の両親も老齢で認知症もすすんできた。要介護状態である。そうして日々の稼業や自分の生活のこまごまとしたことに追い立てられていると、広い世界の種々の出来事に考えをめぐらす意欲はしぼんでゆく。社会問題に関心はあっても感度が鈍り、何が善か、正しいかなど疎かにしがちだ。13 年前に私は東北・石巻の教会に宿泊し、地震・津波被害にあった家屋の片づけに数日のボランティアの機会をいただいたが、今年の能登半島地震は、京都にて能登出身の方に被災した故郷の話をうかがう程度の関わりに止むのではとも思う。ウクライナやパレスチナ・ガザのニュース映像には心痛むが、遠い出来事のようにも感じる。

この２月に梅田の教会に森達也さんをお迎えしての集会に参加した。20 年近く前だろう、わたしは放送禁止歌と部落差別について書かれた森さんの作品を読み、オウム真理教事件後の教団や周囲の人々に迫ったドキュメンタリー映画（『A』、『A２』）を視聴した。最近に映画『福田村事件』の制作を知り、広汎に人間の暴力や虐殺について執筆されているのにも触れた。

「世界は善悪や正誤などの二元論で構成されていない。絶対的な正義や悪という観念に僕らは陥りがちだが、その混在が世界なのだ。……何かが余り何かが足りない。大事なことはそのすべてを見つめることだ。**絶対に切り捨ててはならない。**」

わたしの知る限りの作品のいずれにも通ずる森さんの主張のように思う。そうして、悪や誤りとして排斥され、憎々しく思われ共感できない相手にこそ肉薄し、相手側の視角を自らの視角にすすんでとり入れようとする。テレビ番組会社に所属し「オウムを避けていたら仕事にならない」から、制作に着手されたというドキュメンタリーは、教団に参集する若者がいたって普通の人である姿を捉え、むしろ周囲に優しく善良であることに気づかせる。それら教団の人びとはメディアから「邪悪」「凶暴」だと報道され、悪罵をぶつけられ、地域住民から立ち退きを迫られ、監視を受けるのだった。だが、しかし撮影のうちに時間がたち、そうした途上にも、住民と親しげに談笑する様子

が見られるようになる。監視・排斥すべき敵にどこか親しみを感じ、ねぎらいたくなる相手にさえなる。あるいは、そもそも知りあう以前から人のよい若者であったのだろう。ただ、そうした人びとが凶悪な殺人事件を起こし、実行にたずさわる集団をなしたのも事実であるだろう、それがなぜなのか？何が人びとを駆りたてたのか？森さんは答えを探そうとされる。「被害側からの視点だけでは実相がわからなくなる」。加害者を罰して安息するべきではない、という。

我われは他の人に危害を加えると、多くの場合に、目を背けて忘れてしまいたくなる。その行いを隠そうとする。人びとから断罪され追い立てられる加害者であれば、話すのを控えて過ごしたり、危害を小さく考えたり、正当化しようとするだろう。あるいは我われは他の人とともに暮らす日々の様々な場面に葛藤を抱えていて、他の人を傷つけて気づかないでいたり、危害に仕返ししたりもする。「狂暴」なオウムを監視し、追い払おうとする過程では、大音声でデモが行われ、信者を暴行したり、不当に逮捕したり、子どもの入学を学校が拒んだりすることもあった。むしろオウムをとり囲む人びとこそ「凶暴」であって、自分もその側にいるようにも思えてくる。私たちは、相手がどこか自分と似ていることに考えが及ぶ程度にだけ、相手を理解するにすぎないのだろう。だから、よくわからない加害側の視点にこそ森さんはつき添い、生活のこまごまとした事柄や、さまざまな関わりの綾に立ち入って周囲の様子を捉え、人となりを理解しようとする。そうして、条件によって被害側と加害側が、思いがけず簡単に、入れ替われるだろうことを教えてくれる。わたしの立場が脅かされ、安心を奪うのが森さんの作品であり、むしろそれはわたしを不快にさせるのだ。

オウム・サリン事件のように不特定の人びとや、抵抗の難しい人びとを多く殺傷する出来事に私たちは恐れおののく。それは身のまわりに起ってはならぬのであって、加害者とわたしは無縁だと思いたいし、憎しみを向けて、遠ざけねばならない。そうして、加害者を敵視し、罪を犯すだろう者を日常生活の外へと、かつ最後には意識の外へと追いやろうとする。敵・味方を分けて、「あいつこそが悪だ」と一斉に叩くことで仲間が結束する。そうして皆は安心しようとし、果たされると忘れてゆく。ところが森さんの映画は、オウムの人びとの誠実さや温厚さ、排斥する側の醜さや滑稽さ

を共に捉えて、オウムは「凶悪」だという多数の声に同調し切り捨てることこそ暴力をはらんでいるのではないかと思いなおさせる。当時日本のバッシングに逆らった作品の制作は、森さん自身を敵視される危険にさらし、実際にもテレビ番組化は制限されたという。

集団的に憎しみの念をふきあがらせ、共感の念を断ってしまいがちな社会に私たちは暮らしている。そしてオウム内部にも、個の多様さを押しつぶす集団の作用があり、普通の人が他者への想像力を停止させ、組織の一員として狂暴で冷酷に振舞う瞬間をうみだしたのでは、と森さんは最近の作品でかえりみる。オウム事件当時より IT 化した今の世界は、虚構で人びとの憎しみをかきたてて、集団による押しつぶしの力も強化されてきたというのが、森さんの見立てだ。

ならば救いはないのか？集会では、森さんから、ご自身がノルウェーを訪問された際の映像を見せていただいた。2011 年 7 月、政府庁舎を爆破、つづけて離島のウトヤ島キャンプ場にて若者に銃を乱射し、77 人を殺害した事件。その犯人のブレイビクが死刑でなく禁固刑とされ、大学生になって学ぶ機会をも与えられていると教えられた。この被害者遺族である父母らは、献花に来た犯人の母親を近くに迎え入れ、「あなたのほうがつらいのだ」と声をかけたという。

あるいは森さんには、知的障害者施設で暮らす人びとが殺傷された相模原事件についての本がある。この 2016 年の事件も衝撃的だが、裁判は結審し、犯人が死刑囚となり、記憶は薄れがちだ。優生思想を実践したとか障害者への差別・偏見に由来するとか、わたしは説明をうけいれて当面を済ませている。そうしないと生きていけないことも多いと言いたい。が、森さんは、そうした姿勢を拒絶する。加害の側からも声を聴いて、人となりや事件の背景への理解を深めようともちかける。また、この森さんの本により、重度障害者の方が裁判中の被告人：植松と面会し対話しているエピソードに触れた。被告人に面会した八木勝自さんは、「（犯人である）植松さんは死刑になると思うけど、私は生きていてほしいと思う」と話しかけている。集団的な報復の感情に飲み込まれない人びとがあるのに気づかされる。

さて、わたしはどうするか？　結論はない。「デイサービス行きませんか？」「はい、結構です、もう十分です、死にたい。」「まあ、そういわずに……」といったやりとりをさせていただける現場で考えていけたらと思う。

シンポジウム

主よ、いつまでですか

（無実の死刑囚・パウロ袴田巌さん獄中書簡より）

「袴田事件」とは？

1966年、現在の静岡市清水区のみそ製造会社の専務一家4人が殺され、従業員だった袴田巌さんが予断と偏見で逮捕起訴された冤罪事件です。死刑を宣告され、獄中から無実を叫び続けていた、元日本フェザー級第6位・プロボクサー袴田巌さん。2014年3月27日弁護団の再審請求により静岡地裁は再審開始と釈放を決定しましたが検察側が抗告し、最高裁から高裁への差し戻しを経て、やっと昨年3月に再審開始が確定、静岡地裁で再審公判が続いています。獄中でカトリックの洗礼を受け、死刑囚のまま姉の秀子さんと故郷で暮らしています。
袴田さんの真実を秀子さんと、救う会副代表の門間幸枝さんに語っていただきます。

【と　き】2024年6月29日（土） 14:00～16:30

【ところ】サクラファミリア・聖堂 大阪市北区豊崎3-12-8

入場無料
申込不要

【シンポジスト】

袴田秀子さん
（巌さんの姉/再審公判補佐人）

門間幸枝さん
（無実の死刑囚・袴田巌さんを救う会副代表）

主　　催：カトリック大阪高松教会管区部落差別人権活動センター
お問合せ：☏075-366-6609（月・火・木 10:00~17:00）
（6月1日以降は事務局移転 075-223-3340）
e-mail/bukatu@kyoto.catholic.jp